

原耕（はらこう）。鹿児島のみならず、日本のカツオ産業を語る際に、看過できない重要な人物です。漁業家でも、医師でも、国会議員でもあった原は、伝説の漁師とも称され、戦前、資源の枯渇に警鐘を鳴らして南方漁場の開拓を実施し、さらに、鯉節製造の発展に寄与するなど、国内外のカツオ産業に多大な貢献をした人物です。本書は、彼の生涯について、これまでの研究成果を踏まえ、外務省外交史料館をはじめ国内外の史資料を駆使して、新たな実相に迫りきった秀作です。昨今、カツオ産業をめぐる厳しい状況には、資源の不安定さ、漁獲・

推薦のことは
これからのカツオ産業に指針を与える好著！

生産量の減少、さらに、それらの担い手の不足など枚挙にいとまがありません。他方、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、出汁のなかで鯉節は代表格であり、無限の可能性を持っています。そこで、今一度、温故知新の精神でカツオ産業を見直すべきであり、本書は重要な指針を与えてくれます。水産業に携わる方はもちろん、食文化に関心のある方など、広く多くの方々に、ぜひ、お読みいただきたい一冊です。
日本カツオ学会前会長・顧問 愛媛大学副学長 若林良和

●南日本新聞に連載されていた

「海を耕した政治家」

の話が

本になりました。

海耕記

筑波書房

●四六版並製

320ページ

定価（本体2,800円＋税）

福田忠弘 著

原耕が

鯉群なぐらに翔けた夢

カツオ漁とカツオ節のためにその身を削った政治家がいます。その正体は、医者で衆議院議員でカツオ漁ナンバーワン漁師の原耕（はらこう）1876年鹿児島生まれ、1933年オランダ領東インドのアンボンで病死）という人物です。原耕は戦前、漁獲量が減って困窮する日本のカツオ漁師のために、現在のインドネシアのアンボンに新天地を築こうとしました。その計画はとても巨大で、デイズ

はらこう
原耕知らずに、カツオを食すことなかれ！

ニerland約5個分の広さの土地に、7000人ももの漁師を移住させ、そこで日本にはカツオ節を、欧米にはツナ缶と魚粉を輸出しようとして計画しましたが、夢半ばで議員在任中に命を落としてしまいました。原耕の墓は今もアンボンに残されています。「海を耕した政治家」が行おうとしたことはなんだったのか、現代の私たちの生活とどのようなつながりがあるのかを紹介します。カツオ節がなくなること、間違いなしです。

鹿児島県立短期大学 商経学科教授 福田忠弘